

『古代アメリカ』20, 2017, pp.79-94

<調査研究速報>

## メソアメリカ文明の通時的比較研究序論

青山和夫（茨城大学）、嘉幡茂（ラス・アメリカス・プエブラ大学／京都外国語大学）、市川彰（名古屋大学）、長谷川悦夫（埼玉大学）、福原弘識（埼玉大学）、塚本憲一郎（カリフォルニア大学リバーサイド校／山形大学）

### 1. 問題の所在と本論の目的

メソアメリカ文明は、旧大陸の諸文明と交流することなく、中米で独自に興隆した一次文明であった[青山2007; Carmack et al. 2007]。その興隆の重要な要因の一つが、自然環境の多様性である。人々が各地域の自然環境に適応した結果、地域毎に文化的な独自性が確立されていった。各地域で発展した社会を繋いでメソアメリカという一つの文明圏へと変貌させた原動力の一つが、人やモノの動きを活発化させ情報の共有化を促進した広域な遠距離・地域間交換ネットワークであった。

現在の中米考古学研究は、各地域の社会変動や盛衰を人類史やメソアメリカ全体の大きな枠組みから理解するのではなく、地域・時代毎に専門化・細分化され、地域史を解明する方向に向かっている[e.g., Nichols and Pool 2012]。この現状に鑑み、筆者らはメソアメリカ文明の比較研究が必要であるとの考えに至った。各地域の事例研究から得られる成果や知見を基に、よりマクロな視点からメソアメリカ文明の盛衰を理解する試みである。

科研費新学術領域研究「古代アメリカ比較文明論」(平成26~30年度、領域代表:青山和夫)のメソアメリカ比較文明論班の目的は、メソアメリカを代表するマヤ文明とテオティワカン文明、メソアメリカ南東部、中央アメリカ南部という中米の諸社会の考古学調査の成果を比較研究し、メソアメリカ文明の盛衰に関する通時的データを提供・分析することである(図1)。各社会の調査では、先古典期と古典期の長期間にわたって居住された遺跡を主に選定した。筆者らは、環境変動に加えて、人口変動、戦争、地域間交換、イデオロギー等の側面からも、中米の諸社会がいつ、なぜ、どのように盛衰したのかを実証的に検証する[青山他 2014]。メソアメリカ文明の通時

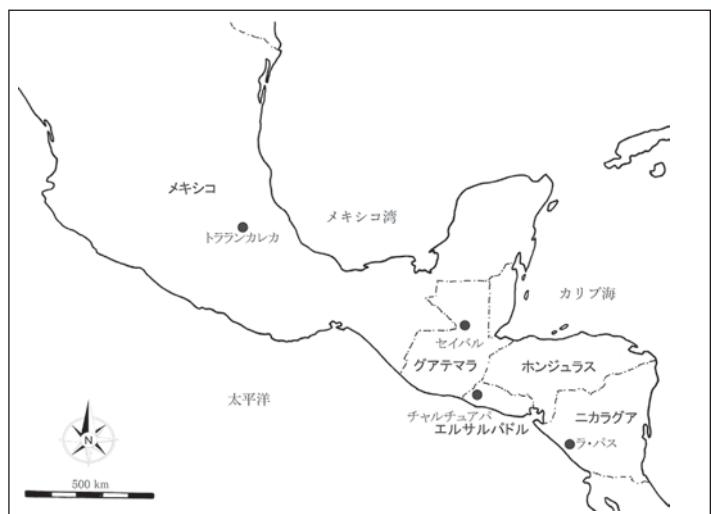


図1 メソアメリカと中央アメリカ南部：本論で言及した主要遺跡

的変化に関連する多種多様な基礎的かつ実証的なデータを互いに検証しながら、メソアメリカ通史の比較研究を行うのが本研究の特色である。さらに地域・時代毎の特性やその変化を追うことに研究の独自性がある。

本論は、メソアメリカ比較文明論の共同研究に関するこれまでの成果について論じる。まずマヤ低地、メキシコ中央高原、メソアメリカ南東部と中央アメリカ南部における長期間の社会変化の事例研究に関する成果を述べる。次に社会を動かす仕組みを提供した公共建築と文字に注目して、その通時的な変化について現段階の成果をまとめる。

## 2. 長期間の社会変化の事例研究

### 2-1. マヤ低地のセイバル

グアテマラのセイバル (Ceibal) 遺跡の調査は、マヤ低地における先土器時代の採集・狩猟による移動型生活から定住社会に移行する共同体の形成過程を明らかにした [Inomata et al. 2015]。従来のマヤ考古学研究では、経済的観点から祖先崇拜や祭祀が分析され、そこから得た知見によって共同体における複雑社会の形成が論じられてきた [Lucero 2003; McAnany 1995]。従来の学説によると、最初に定住した家族または拡大家族が、他の集団よりも経済的・社会的に優位な土地を獲得し、土地所有権を正当化するための手段として祖先崇拜を伴う家族儀礼が行われたとされる。その家族儀礼が他の集団にも浸透していく過程で、土地の権利と儀礼の秘術を独占する家族が共同体の支配層となったという。

ところがセイバル遺跡の調査成果は、従来の社会形成過程の仮説とは異なる。つまり、定住性の度合い、価値観やアイデンティティなどが異なる多様な集団が、公共広場や祭祀建造物の建設・増改築（神殿・広場更新）を共同で行う過程で定住生活が確立されていき、集団が組織化された。公共広場で公共祭祀を慣習的に繰り返す実践によって、社会的結束と同時に社会格差が生まれて、複雑社会が形成されていったのである [Inomata et al. 2015]。

共同体の形成過程において、セイバルの初期の建設活動は、従来考えられていたよりも盛んであった。先古典期中期の前半（前1000～前700年）初頭という、現在のところマヤ低地最古のEグループ（公共広場の西側に方形の神殿ピラミッド・基壇、東側に長い基壇を配置した、太陽の運行に関連した儀式建築群）が建造された

[Inomata et al. 2013]。初期のEグループはこれまで考えられてきたような支配層の権力の象徴ではなく、むしろ共同作業の場であった。その建設や増改築、祭祀の繰り返しによって、様々なイデオロギーが共有されながら物質化されていったと考えられる。そして、Eグループで繰り返し行われた埋納儀礼を含む公共祭祀という反復的な実践は、集団の記憶を形成した。

最初の公共祭祀建築の基壇は土製であったが、増改築され続け、前9世紀に公共広場の西側の基壇は神殿ピラミッドになった（図2）。そして先古典期中期の共同建設作業や公共祭祀による社会格差の発生によって、共同体の中に支配層が生み出されたのである。支配層は、時代が下るにつれ公共祭祀で中心的な役割を果たすようになる。緑色磨製石斧、翡翠製や海産貝のウミギクガイ製の胸飾りなどの供物が、Eグループの公共広場の東西の軸線上に埋納され続けた [青山2015a; Aoyama et al. 2017a; Inomata and Triadan 2016]。セイバルのマヤ支配層は、地域間交換ネットワークに参加して、グアテマラ高地産の翡翠や黒曜石、海産貝のような重要な物資だけでなく、



図2 セイバル遺跡のEグループの発掘調査

観念体系や美術・建築様式等の知識を取捨選択しながら交換して権力を強化した[Aoyama 2015b; Aoyama 2017a]。

セイバルにおける公共祭祀の通時的变化は、公共広場での対面交流が、支配層の権力やイデオロギーを一方的に表象していたのではなく、支配層も含めた共同体における異なった集団のせめぎ合いであったことを示唆している。先古典期中期の後半（前700～前350年）の公共広場の供物は、マヤ低地の西隣のメキシコ湾岸低地南部やチアパス（Chiapas）地方との地域間交換を強く示唆する緑色磨製石斧から、マヤ低地の他のセンターとの密接な交流を示す土器が主流になっていった[Inomata 2014]。同時に公共広場に支配層の墓や生け贋墓が造られ、高度な製作技術が窺われる完形の石刃残核や他の特別な黒曜石製石器などの新たな供物や副葬品が埋納された[Aoyama et al. 2017b]。

セイバルは、先古典期中期から1回目の繁栄期を迎える。先古典期後期（前350～前75年）には、石造の神殿ピラミッドがそびえ立つ、人口1万人ほどの都市に発展した。セイバル遺跡の中心部と周辺部における精密な層位的発掘調査、土器編年の細分化をはじめとする詳細な遺物の分析及びマヤ考古学では例外的に豊富な154点の試料の放射性炭素年代を組み合わせて、高精度編年を確立した[Inomata et al. 2017]。その結果、セイバルでは前75年頃と735年頃から戦争が激化して、社会が政治的に不安定になったことがわかった。

セイバルでは、先古典期終末期（前75～後200年）初頭の前75年頃に、最初の中心地のグループAよりも防御に適した丘の上に新たな中心地のグループDが建設された。古典期前期（200～600年）のフンコ（Junco）2期（300～400年）に1回目の衰退期があり、都市人口が激減した。セイバルの碑文の階段に刻まれた碑文によれば、415年頃にカン・モ・バフラム（K'an Mo' Bahlam）王が統治していた[Mathews and Willey 1991]。都市人口が少ない時期に、マヤ文明の他の王朝の影響あるいは内政干渉によって王朝が成立したと考えられる。

セイバルは、古典期後期（600～810年）のテペヒロテ（Tepejilote）1期（600～700年）に人口が増加して2回目の繁栄期を迎えた。ところがセイバル王朝は、近隣のドス・ピラス（Dos Pilas）＝アグアテカ（Aguateca）王朝との735年の戦争において敗北を喫した。セイバルのイチャーカー・バフラム（Yich'aak Bahlam）王は捕虜にされ、セイバルは2回目の衰退期を迎えた[Martin and Grube 2008]。アハウ・ボット（Ajaw Bot）王は、セイバルの紋章文字（王の称号）を使わず、その最後の碑文を800年に刻んだ。外来のワトル・カテル（Wat'ul K'atul）王が829年に即位し、セイバルは3回目の繁栄期を迎えた。マヤ低地南部の多くの都市が9世紀に衰退する一方で、セイバルは古典期終末期にパシオン（Pásion）川流域で最大の都市として繁栄した。

セイバルが衰退した要因の一つが戦争の激化であった。古典期後期と古典期終末期のセイバル中心部では、石槍の製作と使用が増加した[Aoyama 2017b]。発掘調査によって10世紀に王宮が破壊され、火をかけられたことがわかった[Houston and Inomata 2009:309]。しかも王宮を飾った漆喰彫刻の支配層男性像の胴部しか出土せず、頭部が全く見つかなかった。すなわち王宮では破壊儀礼が行われ、支配層男性像は儀礼的に「打ち首」にされたのである。また「中央広場」に面する神殿ピラミッドでも、同様に破壊儀礼が執行されたことが判明した。セイバル王朝の最後は、暴力を伴った。セイバルは、後古典期（1000～1200年）に小規模に再居住された。

## 2-2. メキシコ中央高原のトラランカレカとテオティワカン（図3）

テオティワカン（Teotihuacan: 前100～後550/600年）の萌芽と発展は、一連の火山噴火と関連づけられてきた[e.g., 嘉幡 2014; 嘉幡・村上 2015]。ポポカテペトル（Popocatépetl）火山（50年頃）、ツィツィナウツイン（Tzitzinatzin）火山（150年頃）、シトレ（Xitle）火山（250年頃）の噴火である。ポポカテペトル火山の噴火以前、つまり先古典期後期（前500～前100年）<sup>註1)</sup>には、メキシコ盆地南西部に位置するクイクイルコ（Cuicuilco: 前800～後250年頃）が政治的・経済的に重要な役割を担っていた。しかしクイクイルコは、これら噴火の直接

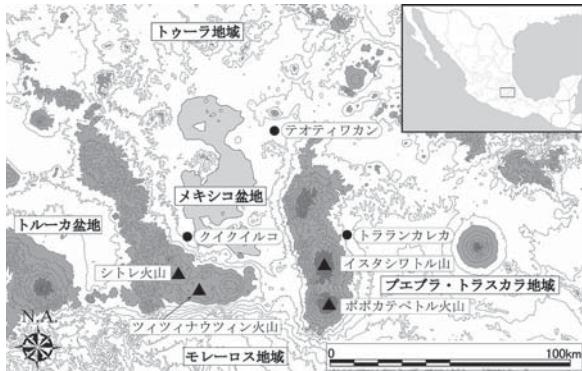


図3 メキシコ中央高原の地形図

的・間接的影響により衰退へと向かう。ここで重要なのは、噴火によりクイクイルコという拠点のみが被害にあったのではなく、被災地域に存在していた数多くの集落との関係、つまり、クイクイルコを中心として形成されていた地域間交換ネットワークが麻痺したということである。同時に、この南に広がるモレロス州やグレロ州との交換ネットワークが分断された影響もあったに違いない。

一連の噴火によって社会が不安定になり、この地域一帯の被災民は二つの安全圏へと向かう。

一つは、従来から指摘されていた、メキシコ盆地北部、つまり後にテオティワカンで古代國家が出現した地域である。もう一つは、先の地域間交換ネットワークの拠点の一つとして参加していたが、直接被害を受けなかったトラランカレカ (Tlalancaleca: 前800～後250年頃) である。先行研究では、この一連の噴火と共に、クイクイルコの衰退の結果としてテオティワカンが発展したと解釈された[e.g., Cowgill 2015:47-50; López and López 2001:116-126]。すなわち、トラランカレカの歴史的役割は考慮されずに古代史が復元されてきたのである<sup>(註2)</sup>。

では、トラランカレカにはメキシコ中央高原の古代国家形成史を解明する上でどのような重要性が認められるのだろうか。要約すれば、テオティワカンの国家形成において必要不可欠であった文化要素の多くが、先行社会のトラランカレカやこの遺跡が位置するプエブラ (Puebla) ・トラスカラ (Tlaxcala) 地域で既に存在していた。国家形成への社会変動は、この遺跡の歴史的役割を考察せば理解できない [Kabata et al. 2014]。考慮すべき文化要素には、世界観の知的体系化と物質化、大規模建造物の建設、建築様式の統一、交換システムの発展、専門集団の登場と製品生産の規格化が挙げられるが、より重要なのは個々の文化要素の有機的連携である。その要になったと考えられるのが、自然景観を取り込んだ世界観の知的体系化と物質化である。考古学的に認識できるのは、ピラミッドと人工洞窟の中心部を意図的に配列させる垂直性である。この垂直性を実現させる意図および完成後のその存在が、人々をトラランカレカやテオティワカンなどの地域に集中させて都市性を備えた中心地が発展し、さらには国家が誕生した原動力の一つとなったと考えられる [嘉幡他 2017; Murakami et al. 2017]。

この観点を基に、従来の学説と比較しながらメキシコ中央高原における国家形成史の復元を試みる。テオティワカンの最初期のパトラチケ (Patlachique) 期 (前100～元年) には、人口は約2万人と算出されている [Cowgill 2015:53]。テオティワカンにはいくつかの建築複合が散在するのみであり [Blucher 1971:423-427]、他の同時代の遺跡に見られるような大規模な建造物は存在せず、社会的にも差異化や階層化は進んでいなかったようである。その後、ポポカテペトル火山の噴火をはさみ、ツアクアリ (Tzacualli) 期 (元年～150年) の終わり頃には人口が6～8万人ほどに膨れ上がったと考えられている。同時に、後に都市中心部となる場所には、小規模ながら月のピラミッドの原型となった公共建造物や他の建造物が建てられる始める。200年頃になると、テオティワカンではピラミッドが巨大化する。月のピラミッドは4期目の増築により、底面積が前時期の9倍にまで拡大された [Sugiyama and Cabrera 2007]。ほぼ時を同じくして、最初の太陽のピラミッドが建てられた [Murakami 2014]。

このようにテオティワカンの発展史は解釈されてきたが、ツアクアリ期に人口が増加した要因の解釈に関して大きな疑問点がある。ポポカテペトルの噴火以前、クイクイルコではおよそ2万人の人口があったとされて

いる。一方でこの時期には、テオティワカンではいまだ大型建造物の建造を開始できるほどの社会基盤は整っていないかった。このような状況下で、テオティワカン社会はクイクイルコ及び周辺地域の被災民をどのように吸収できたのだろうか。この点に関して、コーチル [Cowgill 2015:50] は社会基盤ではなく、イデオロギーの観点から解釈する。あらゆる自然現象に神々の意思が反映されると信じた当時の人々は、噴火を神の怒りと理解し畏れた。コーチルは、テオティワカンの支配層が当時広く崇拜されていた火の老神（後のウエウエテオトル Huehuetéotl）を取り込むことで、安寧を願う被災民の支持を得たのではないかと示唆する。

しかし、火の老神などの神々との関係が体系化され、物質文化として表現されるのはトラミミロルパ (Tlamimilolpa) 期 (250~350 年) になってからである。おそらくコーチルの考えは的を射ている。ただし、それはミカオトリ (Miccaotli) 期 (200~250 年) の終わり頃からトラミミロルパ期になってからだろう。その根拠は、テオティワカン近隣の二つの地域で得られている。まず、メキシコ盆地の西に位置するトルーカ盆地の人口変動である [Sugiura 1998]。この地域は一連の火山噴火の影響を受けなかったものの、250 年前後に盆地の人口が減少した。それはテオティワカン方面へ移住があったからだと指摘されている。テオティワカンに何か人々を魅了するものが存在したに違いない。それは世界観の知的体系化や物質化であった、と筆者らは考える。

もう一つの根拠はトラランカレカで見つかっている。それは、当遺跡で最大規模のセロ・グランデ・ピラミッドの放棄時期が 250 年頃と判明したことに関連する [Kabata and Murakami 2017:Anexo]。さらに、テオティワカンの代表的な建築様式の一つとして採用された、タル・タブレロ建築様式（傾斜壁と垂直壁を組み合わせた様式）が、このピラミッドでも確認されたことが挙げられる。その他に、火の老神だけでなく雷鳴の神（後のトラロック: Tlaloc）や漆喰利用の開始などといった、テオティワカンでも重要であった諸文化要素 [García Cook 1981] の存在も挙げられよう。

このように、テオティワカンにおける国家形成は、メキシコ盆地だけではなくメキシコ中央高原全体の中で引き起こされた社会変動として、先行社会の歴史的役割を考慮した観点から復元する必要がある。トラランカレカやクイクイルコを中心に形成された先古典期終末期（前 100～後 200 年）までの地域間交換ネットワークでは、クイクイルコが衰退したために、トラランカレカ社会の役割がより重要になった。この過程の中で、後のテオティワカン（ミカオトリ期からトラミミロルパ期）で成熟した、世界観の知的体系化や物質化の原型が誕生していった [嘉幡・村上 2015]。その後、原因はいまだに不明であるが、250 年頃にトラランカレカは衰退した。そして、先行社会の文化的な遺産を引き継いだテオティワカンで国家の建設に拍車がかかったと考えられる。

### 2-3. メソアメリカ南東部のチャルチュアバ

エルサルベドルのチャルチュアバ (Chalchuapa) では前 1200 年頃から人々の居住が開始する [Sharer 1978]。チャルチュアバは先古典期後期や古典期後期に繁栄期をむかえる。重要なことは大きな衰退期を経験することなく、地理的にはメソアメリカの周縁に位置しながら近隣社会の情勢を把握し、オルメカ、マヤ、テオティワカンといった他地域との遠距離・地域間交換ネットワークを維持して長期の社会活動を展開させた点にある。

公共建築の建設活動は、チャルチュアバ遺跡で最も北に位置するエル・トラピチエ (El Trapiche) 地区で前 900 ～前 650 年頃に始まる。先古典期中期に高さ約 20m を有していた E3-1 建造物は、同時期のメソアメリカの中でも大型の土製建造物の一つであった。オルメカ的な顔つきの有力者の到来を想起させる石彫 12 号が見つかっており、オルメカ文化との遠距離交換ネットワークへの参加がチャルチュアバの興隆に寄与したと考えられる。

前 400 年頃から活動範囲が広がり、後 50 年頃にはエル・トラピチエ地区の南に位置するカサ・ブランカ (Casa Blanca) 地区にも公共建築群が造られるようになる。この時期には、公共建築群の配置、石彫や埋納儀礼に規則

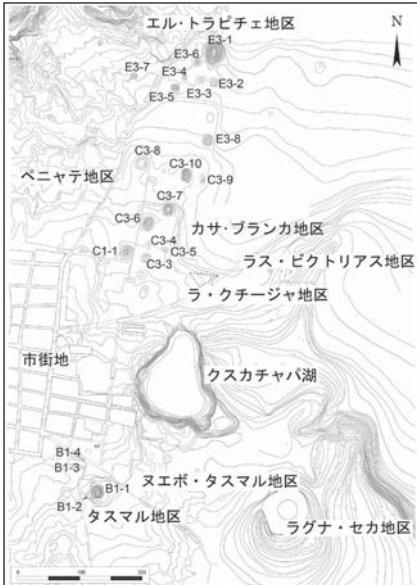


図4 チャルチュアパ遺跡

性が認められる（図4）。公共建築群は三角形（北側に大型の建造物1基、その南側に建造物が向き合うように東西に2基）に配置され、南北の中心軸線上に土器などの供物や石彫が置かれた。文字列を有する石彫、太った神様の石彫、イサパ（Izapa）様式の石彫、素面の石碑・祭壇石複合などが、カミナルフユ（Kaminaljuyú）やイサパといった先古典期後期・終末期の中心的なセンターに広く浸透していた観念体系を共有していたことを示す。同時に、地域独自の様式化されたジャガーヘッドの石彫も制作された。公共建築群がたつ開放的な公共広場では、民衆の埋納儀礼の参加や石彫の拝礼が容易であった。

先古典期中期からの公共建築群の景観を更新しながら新しい観念体系や文字などの知識の導入し、地域に根差した権力の象徴を創造して民衆の支持を得ることによって支配層が台頭した。加えて、装飾性に優れたウスルタン様式土器の生産と流通の統御が、経済的基盤を支え、チャルチュアパ最初の繁栄期をもたらしたと考えられる。墓には顕著な差異がみられないことから、

後世と比較すると社会格差はそれほど大きくなかった。

エル・トラピチエ地区やカサ・ブランカ地区の公共建築群は、200～400年間に放棄される。破壊された石彫や建造物、捕虜と考えられる後ろ手にされた人物土偶などが見つかっていることから、戦争が放棄の要因の一つであった可能性がある[市川 2014]。この現象は、カミナルフユをはじめとするマヤ南部地域の衰退[Inomata and Henderson 2016]の余波とみることもできる。しかし、チャルチュアパでは、タスマル（Tazumal）地区に公共建築群を遷移し、以後も社会活動を継続した。

公共建築群の放棄と遷移の後の400～450年頃に、イロパンゴ（Ilopango）火山が噴火する[Dull et al. 2001; 市川 2017]。イロパンゴ火山灰層の下と上の層では、テオティワカンとの遠距離交換ネットワークへの参加を示唆する土器（三脚円筒形土器やカンデレーロなど）が見つかっている。近隣のカミナルフユやコパン（Copán）ほどではないものの、テオティワカン的要素の導入は支配層の権力強化につながったであろう。

古典期前期（250～600年）のタスマル地区の公共建築は、先古典期とは明らかに異なる。建築は東西軸を意識し、アドベや泥漆喰を主たる建築材として列柱や入口の限定された部屋が造られるようになる。また公共建築の内部に質量共に他を凌駕する副葬品をもつ墓が造られる。こうした閉鎖空間の創出や厚葬墓の出現は、先古典期と比べて社会格差が拡がり、より独占的性格を有する支配者が出現した証拠といえよう。さらには、古典期には儀礼や観念体系に変化が生じた。先古典期に大量に製作された土偶、公共建築の正面に立てられた石彫や戦争の存在を示唆する遺物・遺構も古典期前期には見られなくなる。

タスマル地区では、公共建築の建設中にイロパンゴ火山灰が降下しているが、その後も建設活動は継続された。公共建築群の周辺は大量の火山灰を用いて整地された<sup>註3)</sup>。また、土器型式からも火山灰降下の前後で大きな変化はなく、噴火による断絶は想定し難い。チャルチュアパから約30km東に位置するサン・アンドレス（San Andrés）でも、噴火からしばらくして公共建築の建設活動が再開した。再開にあたっては、大量の火山灰を建築材として使用し、公共建築を複数回（現在のところ少なくとも3回）にわたって増築した。新大陸で完新世最大規模と評されるイロパンゴ火山の噴火によって噴出した大量の火山灰によって、自然環境は大きく変化し、

地域間交換も変更を余儀なくされたと推定される[Dull et al. 2001]。しかし、上述の考古学的証拠は、先スペイン期社会の噴火災害に対するレジリアンス（回復力）の高さを示すといえよう[市川 2017]。

古典期後期（600～900 年）の公共建築は、アドベや泥漆喰の建造物から石製建造物へと変貌する。新たな建築材や建築様式の導入は、技術革新や労働組織の再編を促しただけでなく、見る者の心象の変化も促しただろう。こうした変化と共にチャルチュアパの支配層は、マヤ低地、メキシコ湾岸や中間領域など広範囲の遠距離・地域間交換ネットワークを強化することによって、社会の繁栄を達成していった。特に、近隣のコパン王朝との強い政治的結びつきは重要であった。コパン 12 代目王カフク・ウティ・ウィツ・カヴィール (K'ahk Utí Witz' K'awil) からチャルチュアパの支配者に下賜品が送られている[Card and Zender 2016]。これは地域間交換ネットワークの拡張を目論んだコパン王朝の戦略の一環ではあったが、チャルチュアパの支配者の権力強化にもつながった。コパン王朝と直接的に交流したもの、チャルチュアパでは文字文化は発達せず、疑似文字レベルにとどまった。文字や石彫を通じて達成された観念体系の共有が先古典期の繁栄を促したのとは対照的である。

因果関係はまだよくわからないが、マヤ低地南部の諸都市が衰退する 9 世紀頃に、チャルチュアパも衰退する。この時期にチャルチュアパでも戦争の痕跡がみられるのは、無関係ではなかろう[市川 2014]。しかし、これはチャルチュアパの最期を意味しない。古典期後期の終わり頃から後古典期（900 年～16 世紀）は、ユト・アステカ (Uto-azteca) 語族に属しメキシコ中央高原に起源のあるナワトル語系集団が東進してくる時期と重なる。チャルチュアパの人々は、チャック・モール (Chac Mool)、トラロック、シペ・トテック (Xipe Totec) といった外来の神々を新たな信仰の対象として受け入れ、より小規模ではあるものの社会活動を維持した。

#### 2-4. 中央アメリカ南部のニカラグア太平洋岸

中央アメリカ南部では、ニカラグア太平洋岸とコスタリカ北西部にメソアメリカ的文化要素が色濃く見られる。これらは主としてスペイン征服期から植民地時代に確認された言語学的、民族史学的証拠による[Esgueva 1996: 26-29, 41-42; Newson 1987: 26-33]。

ニカラグア太平洋岸では、マナグア (Managua) 湖に近いビジャ・ティスカパ (Villa Tiscapa) 遺跡[Espinoza 1995] とニカラグア湖に浮かぶオメテペ (Ometepe) 島 [Haberland 1966]、コスタリカ北部ではアレナル (Arenal) 湖の湖畔のトロナドーラ・ビエハ (Tronadora Vieja) 遺跡[Bradley 1994]において、前 2000 年紀に遡る形成期の土器が発見されている。後者では、7 軒分の掘っ立て柱の痕、トウモロコシ化石や打製・磨製の掘り具と思われる石器など農耕の痕跡も見られる。中央アメリカ南部に連なる淡水湖の湖畔では、農耕定住村落が早い時代に始まっていた。しかしながら、その後の中央アメリカ南部では、メキシコ中央高原やマヤ低地のように国家と呼べるような大規模で複雑な社会はついに出現しなかった。スペイン人到来時にも、様々な民族が小規模な首長制社会や部族社会を形成していた。では、この地域は大きな社会変動はなく、形成期から後古典期まで緩慢な社会変化しか見られないかというと、決してそうではなかった。

当該地域において先スペイン期の最も大きな社会変動は、現在まで知られている限り、メソアメリカ系の民族集団の移住である。移住の年代は古典期終末期から後古典期に当たる 800 年以降とされる。この時代の遺跡としては、直径 20m、高さ 2.8m のマウンド 1 が残る、マナグア湖畔のラ・パス (La Paz) 遺跡が注目される[Hasegawa 2016]。土器から見て、年代はサポア (Sapoa) 期 (800～1350 年) からオメテペ (Ometepe) 期 (1350～1550 年) である。最初に方形の石造基壇が建設され、その後、石と土をかぶせて、最終的には外面を石で覆った円錐形のマウンドが形成された。今まで、埋葬や埋納品は出土していない。生活遺物と思われる土器片なども少ない。生活廃棄物の希薄さから、居住マウンドではなく公共建築と考えられる。



図5 ラ・パス遺跡のマウンド1

このマウンドは、北のメキシコ中央高原やマヤ低地の石造建造物と比べると小規模であるが、中央アメリカ南部では例外的な建築である。ニカラグア湖周辺、グラナダ (Granada) 地方に所在する、バガセス (Bagaces) 期 (300~800年) のアヤラ (Ayala) 遺跡では、高さ4mのマウンドが記録されているが、自然地形を利用した土製のマウンドである [Salgado 1996]。サポア期からオメテペ期では、ラ・パス遺跡に比肩する規模では、唯一ロス・プラセレス (Los Placeres) 遺跡のマウンド1が挙げられる [Stauber 1996]。ただし、調査されずに破壊されており、建築様式などに関する情報はない。

ラ・パス遺跡のマウンド1の第一段階の建築は、粗いながらも石積みの方形基壇である。今まで同基壇の西面が3.3mの長さであることのみ確認されており、規模としては小さい。この基壇がどのような機能を果たしていたのかは、いまだ判然としない。方形基壇については、泥塗り壁が焼けたものと思われる焼土塊が多く出土していることから、有機質の材料の建物が上面に建てられていたと思わ

れる。規模も小さく、上部構造は有機質の建築であるとはいえ、メソアメリカの文化要素であるこの石造の方形基壇は、中央アメリカ南部では特筆すべき稀な遺構である。

これまで調査されているマナグア湖周辺 [長谷川 2016] とニカラグア湖周辺 [McCafferty and Steinbrenner 2005; McCafferty 2010] の遺跡の発掘調査によれば、メソアメリカ的な考古学遺物は非常に少ないか、あるいは欠落している。切石積みの基壇建築については上記の通りである。黒曜石の遺物は、石器が多く出土しているマナグア湖畔のチラマティーヨ (Chilamatiyo) 遺跡 [Hasegawa 2015] で273点中の11点であり、大きなものでも1cm程度の小さな剥片である。メソアメリカの主食であるトウモロコシの植物遺体やトルティーヤを調理するためのコマル (Comal 土製フライパン) は、ニカラグア太平洋岸では出土しない。ニカラグア湖周辺の遺跡では、化学分析の結果からもトウモロコシの痕跡は確認されなかった。代わって食料源となったマニオクをすり下ろしたと推定されているラスピディータ (raspadita) と呼ばれる細石刃が出土している [Debert and Sheriff 2007]。また、チラマティーヨ遺跡をはじめ、土器片に抉りを入れて漁労用の錘としたと考えられる遺物が大量に出土している。のことや魚骨、獸骨といった動物遺存体から、湖とその周辺の水産資源に大きく依存した生活様式がうかがえる。メソアメリカの宗教儀礼にはつきものの香炉や土偶も出土せず、球技場や文字も確認されていない。

ラ・パス遺跡のマウンドは、放射性炭素年代<sup>(註4)</sup> から見てサポア期の終わり頃 (後1224~1280年) に方形基壇が建てられ、サポア期の終わりからオメテペ期の始まり (後1280~1388年) にかけてそれが覆われた<sup>(註5)</sup>。サポア期とオメテペ期の開始は、それぞれオトマンゲ (Otomangue) 語族のチョロテガ (Chorotega) とユト・アステカ語族のニカラオ (Nicarao) の中央アメリカ南部への移住に対応すると想定されている。しかしながら上記の通り、言語学的、民族史料的な証拠はあるが、考古学的証拠は希薄である。メソアメリカ的な文化要素としては、多彩色土器に描かれた図像 (羽毛の生えたヘビ、風の神など) が目を引く程度である。

こうした時代的な脈絡において、ラ・パス遺跡に見られる切石積みの方形基壇は、どのような文化的な意味をもつであろうか。このマウンドの東側が湖に向かって起伏のない平坦な広場状の空間になっていることからも、共同体の公共祭祀儀礼が行なわれたことが推定される。しかし、このマウンドが中央アメリカ南部で例外的な遺構であることを考えれば、さしたる重要性をもっていなかつたか、あるいは逆にラ・パス遺跡の重要

性と特殊性を物語っているのかもしれない。この時期にニカラグア太平洋岸とコスタリカ北西部に見られる遺跡は多様であり、メソアメリカ系の集団の移住プロセスの複雑性を物語っていると考えられる。

方形基壇を築いたメソアメリカ的な建築がある一方、マナグア市内のネハパ（Nejapa）遺跡[Balladares and Lechado 2013]のように、低い円形の居住マウンドが多数見られる事例もある。円形の居住基壇はメソアメリカでは珍しいので、移住者であるチョロテガやニカラオなどと、先住民であった人々の混在を示唆する可能性がある。やがて移住者たちは、食生活その他の物質的な面では在地文化を取り入れて同化し、言語や、多彩色土器その他の媒介に描かれた図像などに象徴される宗教イデオロギーといった、精神的な面では辛うじて自らの文化的なアイデンティティを保っていたのかもしれない。ラ・パス遺跡の方形基壇が、やがて詰め土で覆われてしまい、最終的には円錐形マウンドに造り替えられる過程はこの点で示唆的である。

### 3. 社会を動かす仕組みを提供した公共建築と文字の通時的な変化

メソアメリカという神々の意思が尊重される世界の中で、支配層は社会の指向性を模索し実行に移そうとした。一方、民衆は支配層が決定した方法を共有するが常に監視し、それが相容れない場合は離反した。つまり、支配層と民衆のせめぎ合いが社会を動かす仕組みを更新させていったと考えられる[e.g., Tsukamoto and Inomata 2014]。このせめぎ合いの中心となる場が公共建築や公共広場であり、石碑などに刻まれた過去の儀礼や歴史を口頭で伝承する場であった。公共建築は「見る」人々を突き動かし、より巨大な公共建築を建造して社会を動かす仕組みを編み出した。公共建築に加えて、王族や貴族といった一握りの支配層が読み書きした文字は「語り」を物質化し、社会を動かす新たな仕組みを提供した。文字記録の有無、設置場所や記録内容、そしてピラミッド型建造物など公共建築と総称される建造物の用途の違いを考察することで、社会を動かす仕組みが時代や地域によって異なっていたと理解できるようになる。

マヤ支配層は、地域間交換ネットワークに参加して、重要な物資だけでなく、観念体系や美術・建築様式等の知識を取捨選択しながら交換して権力を強化した。セイバルで先古典期中期初頭に建設されたEグループは、メソアメリカの4方位や小宇宙の概念が既に形成されていたことを示唆する。セイバルの初期の公共建築は低い土製の基壇であり、当初から人工の神聖な山を象徴したのではない。より大きな石造神殿ピラミッドに増改築された後に、神聖な山という文化的な意味が付け加えられたといえる。

先古典期中期には公共建築や公共広場を建設・更新する過程で、様々なイデオロギーが共有されながら物質化されていった。公共広場が公共祭祀の主要な舞台であり、供物や支配層の墓は主に公共広場に埋納された。公共広場で繰り返し行われた公共祭祀という反復的な実践は、集団の記憶を生成し、中心的な役割を果たす支配層の権力が時代と共に強化された。一方、古典期マヤ文明の神殿ピラミッドは王権を強化する神聖な山を象徴した。神殿更新が繰り返され、その内部に壮麗な王墓や供物が埋納された。古典期には、先古典期に公共建築の外壁を装飾した神々の漆喰彫刻（「見る/見せる」という効果）に取って代わって、個人の王の像や諸活動をマヤ文字で記した石碑などの石彫（「語り/見せる」という効果）が公共広場に立てられるようになり、王権や宗教観念の表現手段の重点が移った。

トランカレカやテオティワカンでは、「語り」よりも公共建築とその大型化を用いて「見せる」実践が優先された。対象者は民衆と神々である。これは、誰に対して公共建築を舞台として儀礼を行ったのか、そして「見せる」必要があったのかの度合いが、マヤ低地とは異なっていたからであろう。古典期マヤ文明では、王や貴族が公共広場に集まった大衆を前に公共広場や神殿ピラミッドで劇場型の儀礼を行っていた。そのような

大衆を収容する公共広場は、トラランカレカやテオティワカンのピラミッドにも併設されていることから、メキシコ中央高原でも劇場型の儀礼を行っていたことは想像に難くない。特に5期目の月のピラミッドの頂上部は建物がない開放空間であったことが確認されている[Sugiyama and Cabrera 2007]。つまり神々に「見せる」儀礼が、広場の参加者だけでなく、都市の全ての民衆から「見える」ことが重要であった。

メキシコ中央高原では、古典期マヤ文明のような王朝史を詳細に記録した文字が発達しなかった。トラランカレカにおいて文字の存在は確認されていない。テオティワカンでは記号は120ほど存在するが、これらがマヤ地域のように表記体系として使用されていたのかを示す直接的な証拠は存在しない[e.g., Langley 1992]。テオティワカンの公共建築を装飾する神々の石彫や壁画は、民衆に「見せる」ために大きな意味があった。人物像は、主に没個性的・抽象的といえる。古典期のマヤ低地では、王朝や歴代の王を称える碑文や特定個人の図像が石碑や神殿ピラミッドに刻まれ、他の支配層や民衆に誇示して「見せる」効果が発揮された。

古典期マヤ文明では、神殿ピラミッド内部に他界した王を埋葬することによって、より強力な力が得られ、王朝は繁栄すると信じられた。一方、トラランカレカやテオティワカンでは、王政であったのかどうかも不明である。また、巨大ピラミッドの内部調査が進んでいるテオティワカンでは、埋葬墓は発見されているが、王墓とは考えられていない[Sugiyama and López 2007]。ピラミッドは特定の個人のためではなく、公共性が強かつた。古典期マヤ文明では、王や王朝といった特定の個人・集団の利益を優先させる目的で「語り」や「見せる」行為が物質化された。対照的に、メキシコ中央高原の支配層は「語り」よりも「見せる」行為、つまり神々と交信する儀礼空間の視認性と大衆性により重点を置いたと言える。このことは、トラランカレカやテオティワカンの社会が、人々の意思決定と共に、一連の火山噴火の文脈の中から誕生し発展したことと無関係ではないだろう。

メソアメリカの辺境に位置するチャルチュアパは、各時代の社会情勢に乗じて遠距離・地域間交換ネットワークを再編し、新たな知識・情報、観念体系を導入しながら長期間の社会活動を維持した。こうした中で確かに公共建築は、通時的に社会を動かす仕組みとして重要であった。先古典期には公共建築群によって作り出された空間の中で執り行われた公共祭祀が社会成員間の紐帯を強化した。公共建築群の正面に建立された石彫の図像や文字は、「見る/見せる」だけでなく「語り」という手段で支配層が権力を強化するのに役立った。

他方、古典期には公共建築の文化的な意味が変化した。古典期前期には外見上は「見せる」ことを意識しているのかもしれないが、入口の限定された部屋や視認性に欠けた場所における葬送儀礼が行われるようになる。つまり儀礼などへの参加が特定の人々に制限される。換言すれば、大勢に「見せない」という秘儀的・独占的側面が支配者の神秘性、そして権力を高めていく要素になっていったともいえる。石彫や土偶といった儀礼と関連する器物が生産されなくなることは無関係ではなかろう。また先古典期には文字があったにもかかわらず、古典期には文字は社会を動かす重要な仕組みとして踏襲されなかった。個人の偉業を「語り」「見せる」ことによって王権を強化していく古典期マヤ文明の諸王とは異なる社会の仕組みだったのであろう。

社会活動に混乱をもたらしたとされるイロパンゴ火山の噴火後も公共建築の建設は継続された。むしろ、公共建築の建設活動は活発化したようにも見える。社会活動に悪影響を及ぼす加害因子であるはずの大量の火山灰を使用して、チャルチュアパでは公共建築群の周辺を整地し、サン・アンドレスでは公共建築を複数回増築した。公共建築の建設活動は、大災害の際にも社会を動かす仕組みとして重要であったといえよう。

古典期後期のチャルチュアパの公共建築群は、それまでの伝統であった土（盛土、アドベ、泥漆喰）という建築材から石に変わった。恒久性や永続性をイメージさせる石がもつ物質性は、公共建築を見る者の心象を大きく変えたに違いない。この時期は、近隣のコパンという古典期マヤ文明の中でも傑出した文字文化を有した王

朝と政治的連帯を結んでいた。しかしながら、チャルチュアパの支配者は個人の偉業を文字で刻んで「語り」「見せる」という手段を、社会を動かす主たる仕組みとして用いなかった。

中央アメリカ南部の社会に文字（表記体系）が伝播しなかったという事実は、これらの地域にあった政治的権力や宗教的権威が、古典期マヤ文明とは異なる形態をとっていたことを示唆する。古典期のマヤ文字は、王の事績や王家の歴史を時の流れの中に位置づけることを主眼として用いられた[Martin and Grube 2008]。中央アメリカ南部の社会では、世襲制の王権が存在した考古学・民族史料の証拠はない。文字の存在を知る人々がいたとしても、文字の必要性は意識されず、結果として受容されなかつたと説明できよう。

上述のように、古典期マヤ文明の諸王は、ピラミッドを神聖な山の象徴とし、神殿を冥界への入口の洞窟になぞらえ、神々と人間世界の仲介者として自らの権威と権力を人々に認めさせた。大規模な建造物を造らなかつた中央アメリカ南部の首長たちは、永続的に人々の視覚に訴える自らの権威と権力の正統性の象徴を必要としなかつたのだろうか。ニカラグア太平洋岸に見られるアルター・エゴ（*altar ego*）と呼ばれる石造彫刻は、動物を背負った人物を表している。ニカラグア内陸部にも人物の石造彫刻が多く認められる。前者は没個性的、後者は抽象化されたものであり、古典期マヤ文明の石碑に表現された王のように特定個人を描写しているかは定かではない。これらは、トーテムのような共同体員相互の紐帶の象徴の役割を果たしていたと推測される。

#### 4.まとめ

マヤ低地やメソアメリカ南東部では、先古典期には主に社会の紐帶を促したイデオロギー操作が、古典期にはより独占的・排他的なイデオロギーに変遷した。マヤ文字、宗教体系や巨大な石造神殿ピラミッドなど、古典期マヤの王権のほとんど全ての要素が、先古典期後期に既に形成されていた[青山 2017]。メキシコ中央高原やマヤ低地をはじめとするメソアメリカ文明を形成した社会は、従来考えられていたよりも早い段階から複雑化しており、先行社会の文化的蓄積と継承が後のメソアメリカの諸国家を誕生させたといえよう。古典期マヤ文明では、「見る」人々を突き動かした公共建築に加えて、王や王朝といった特定の個人・集団の利益を優先させる目的で「語り」を物質化した文字が社会を動かす仕組みを提供して王権を強化した。石碑や神殿ピラミッドには文字だけでなく、王など特定個人の図像が刻まれ、他の支配層や民衆に誇示して「見せる」効果が発揮された。

メキシコ中央高原では、ピラミッドは特定の個人のためではなく、公共性が強かつた。支配層は「語り」よりも「見せる」行為、つまり神々と交信する儀礼空間の視認性と大衆性により重点を置いた。先古典期マヤ文明、メキシコ中央高原やメソアメリカ南東部では、文字よりもむしろ公共建築が「見る」人々を突き動かし、より巨大な公共建築を建造して社会を動かす仕組みとして重要な役割を担つた。中央アメリカ南部の首長制社会では、文字は使われず、首長自らの権威と権力の正統性を「見せる」大規模な公共建築は建造されなかつた。

今後は、メソアメリカの諸文明・周縁社会の盛衰に関する基礎的な通時的データの分析と比較研究をさらに進める。メソアメリカ文明の形成や社会変化の過程と要因を解明して比較するために、より精緻な編年を確立していく。これまでの調査成果に加えて、今後の調査に基づいてメソアメリカ文明研究の今日的意義についても検討する。さらにメソアメリカ文明とアンデス文明の諸社会の類似点（共通性）と差異（変異性）をより明らかにしていく[青山 2016]。今なお学術研究と一般社会のもつ知識の隔たりは大きい。一次文明であった両文明はそれぞれどのような文明なのかについて一般社会に積極的に発信し続けていく所存である。

### 【謝辞】

本論は、平成26～30年度日本学術振興会科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（領域代表：青山和夫、課題番号26101003）の成果の一部であり、2016年12月16日に名古屋大学で開催した「古代アメリカの比較文明論」のメソアメリカ比較文明論班の研究会の諸発表とコメントを大幅に修正加筆したものである。研究会では、「古代アメリカの比較文明論」の公募研究「メソアメリカ文明の高精度編年体系の確立と巨大噴火インパクトの広域比較研究」（平成27～28年度）の研究代表者の伊藤伸幸氏がコメントーターを務め、有益なコメントをいただいた。2名の査読者から極めて建設的な示唆があった。記して感謝します。

### 註

- (註1) メキシコ中央高原とマヤ地域では、時代と時期の年代幅に若干の差があることに注意。
- (註2) この背景には、現代メキシコと考古学の特殊な政治・経済関係、そしてこれを発端とする学術的解釈の先入観が存在することを見落としてはならないが、別稿で述べているため割愛する[嘉幡2016]。
- (註3) 柴田潮音氏とロシオ・エレラ（Rocio Herrera）氏（いずれもエルサルバドル共和国文化庁文化自然遺産局考古課）からご教示いただいた。
- (註4) 以下の年代測定は、2016年に東京大学総合博物館放射性年代測定室共同事業として実施された。
- (註5) ただし実際には、現行編年のサボア期からオメテペ期への移行年代については深刻な疑問が呈されており、この二つの時期が相前後するのではなく、大部分並行している可能性もある。

### 参考文献

#### 青山和夫

- 2007 『古代メソアメリカ文明 マヤ・ティワカン・アステカ』 講談社選書メチエ、東京。
- 2015a 「マヤ文明の起源と公共祭祀—グアテマラ・セイバル遺跡の公共祭祀建築と緑色石製磨製石斧の供物を中心にして—」『古代文化』67(2):53-72。
- 2015b 「先古典期マヤ文明の宗教儀礼とともにづくり—グアテマラのセイバル遺跡で先古典期中期に埋納された黒曜石製石器を中心にして—」『古代アメリカ』18:41-63。
- 2016 「メソアメリカ比較文明論試論—古代アメリカの比較文明論の新展開に向けて—」『古代アメリカ』19:47-61。
- 2017 「先古典期マヤ文明の王権の起源と形成」『古代文化』68(4):502-509。

#### 青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木紀

- 2014 「「古代アメリカの比較文明論」プロジェクトの目標と展望」『古代アメリカ』17:119-127。

#### Aoyama, Kazuo

- 2017a Ancient Maya Economy: Lithic Production and Exchange Around Ceibal, Guatemala. *Ancient Mesoamerica* 28(1):279-303.
- 2017b Preclassic and Classic Maya Interregional and Long-Distance Exchange: A Diachronic Analysis of Obsidian Artifacts from Ceibal, Guatemala. *Latin American Antiquity* 28(2):213-231.

#### Aoyama, Kazuo, Takeshi Inomata, Flory Pinzón, and Juan Manuel Palomo

- 2017a Polished Greenstone Celt Caches from Ceibal: The Development of Maya Public Rituals. *Antiquity*

- 91(357):701-717.
- Aoyama, Kazuo, Takeshi Inomata, Daniela Triadan, Flory Pinzón, Juan Manuel Palomo, Jessica MacLellan, and Ashley Sharpe  
 2017b Early Maya Ritual Practices and Craft Production: Late Middle Preclassic Ritual Deposits Containing Obsidian Artifacts at Ceibal, Guatemala. *Journal of Field Archaeology* 42(5):408-422.
- Balladares, Sagrario and Leonardo Lechado  
 2013 Investigaciones arqueológicas Comarca Nejapa. Informe Técnico, CADI - Departamento de Historia, Universidad Nacional Autónoma de Nicaragua, Managua.
- Bradley, John  
 1994 Tronadora Vieja: An Archaic and Early Formative Site in the Arenal Region. In *Archaeology, Volcanism and Remote Sensing in the Arenal Region, Costa Rica*, edited by Payson Sheets and Brian McKee, pp. 73-86. University of Texas Press, Austin.
- Blucher, Darlena K  
 1971 Late Preclassic Cultures in the Valley of México: Pre-Urban Teotihuacán. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, Brandeis University, Waltham.
- Card, Jeb and Marc Zender  
 2016 A Seventh-century Inscribed Miniature Flask from Copan Found at Tazumal, El Salvador. *Ancient Mesoamerica* 27:279-292.
- Carmack Robert M., Janine L. Gasco, and Gary H. Gossen  
 2007 *The Legacy of Mesoamerica: History and Culture of a Native American Civilization*. Second edition. Prentice Hall, Upper Saddle River.
- Cowgill, George L.  
 2015 *Ancient Teotihuacan: Early Urbanism in Central Mexico*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Debert, Jolene and Barbara Sheriff  
 2007 Raspadita: A New Lithic Tool from the Isthmus of Rivas, Nicaragua. *Journal of Archaeological Science* 34(11):1889-1901.
- Dull, Robert A., John R. Southon, and Payson D. Sheet  
 2001 Volcanism, Ecology and Culture: A Reassessment of the Volcan Ilopango TBJ Eruption in the Southern Maya Realm. *Latin American Antiquity* 12:25-44.
- Esgueva, Antonio  
 1996 *La Mesoamerica nicaraguense: documentos y comentarios*. Universidad Centroamericana, Managua.
- Espinoza, Edgar  
 1995 La cerámica temprana de Nicaragua y sus vínculos regionales. In *Descubriendo las Huellas de Nuestros Antepasados: El Proyecto “Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua”*, edited by Frederick Lange, pp.17-24. Alcaldía de Managua, Instituto Nicaragüense de Cultura, University of Moble Latin American Campus, University of Colorado in Boulder, Managua.
- García Cook, Ángel

- 1981 The Historical Importance of Tlaxcala in the Cultural Development of the Central Highlands. In *Handbook of Middle American Indians, Supplement 1: Archaeology*, edited by Victoria R. Bricker and Jeremy A. Sabloff, pp. 244-276. University of Texas Press, Austin.
- Haberland, Wolfgang
- 1966 Early Phases of Ometepe Island, Nicaragua. *36th Congreso Internacional de Americanistas, Actas y Memorias* 1: 399-403.
- 長谷川悦夫
- 2016 「中央アメリカ、ニカラグア共和国マナグア湖畔の考古学調査」『埼玉大学紀要・教養学部』51(2): 223-241。
- Hasegawa, Etsuo
- 2015 Informe de las investigaciones en el sitio Chilamatillo (N-MA-8-100), Municipio de Tipitapa, Departamento de Managua, Nicaragua. Archivo: Instituto Nicaragüense de Cultura, Managua.
- Hasegawa, Etsuo
- 2016 Informe de excavaciones en el sitio La Paz y Reconciliación, Municipio de Mateare, Departamento de Managua, Nicaragua. Archivo: Instituto Nicaragüense de Cultura, Managua.
- Houston, Stephen D. and Takeshi Inomata
- 2009 *The Classic Maya*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 市川彰
- 2014 「マヤ南部周縁地域における戦いの痕跡」『考古学研究』60(4): 85-96。
- 2017 「メソアメリカ南東部周縁社会の盛衰と巨大噴火」『古代文化』68(4): 93-100。
- Inomata, Takeshi
- 2014 Plaza Builders of the Preclassic Maya Lowlands: The Construction of a Public Space and a Community at Ceibal, Guatemala. *Mesoamerican Plazas: Arenas of Community and Power*, edited by Kenichiro Tsukamoto and Takeshi Inomata, 19-33. University of Arizona Press, Tucson.
- Inomata, Takeshi and Lucia Henderson
- 2016 Time Tested: Re-thinking Chronology and Sculptural Traditions in Preclassic Southern Mesoamerica. *Antiquity* 90(350):456-471.
- Inomata, Takeshi and Daniela Triadan
- 2016 Middle Preclassic Caches from Ceibal, Guatemala. *Maya Archaeology* 3:56-91.
- Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Kazuo Aoyama, Victor Castillo, and Hitoshi Yonenobu
- 2013 Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origins of Lowland Maya Civilization. *Science* 340(6131):467-471.
- Inomata, Takeshi, Jessica MacLellan, Daniela Triadan, Jessica Munson, Melissa Burham, Kazuo Aoyama, Hiroo Nasu, Flory Pinzón, and Hitoshi Yonenobu
- 2015 Development of Sedentary Communities in the Maya Lowlands: Coexisting Mobile Groups and Public Ceremonies at Ceibal, Guatemala. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 112(14):4268-4273.
- Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Jessica MacLellan, Melissa Burham, Kazuo Aoyama, Juan Manuel Palomo, Hitoshi Yonenobu, Flory Pinzón, and Hiroo Nasu,

- 2017 High-precision Radiocarbon Dating of Political Collapse and Dynastic Origins at the Maya Site of Ceibal, Guatemala. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 114(6):1293-1298.
- 嘉幡茂  
 2014 「テオティワカン—『神々の都』の誕生と盛衰」『文明の盛衰と環境変動：マヤ・アステカ・ナスカ・琉球の新しい歴史像』（青山和夫・米延仁志・坂井正人・高宮広土編） pp. 55-71、岩波書店、東京。  
 2016 「メキシコの考古学事情（前編）」『考古学ジャーナル』689:31-33。
- 嘉幡茂・村上達也  
 2015 「古代メソアメリカ文明における古代国家の形成史復元：『トラランカレカ考古学プロジェクト』の目的と調査動向」『古代文化』67(3):99-109。
- 嘉幡茂・村上達也・フリエタ マルガリータ=ロペス フアレス  
 2017 「自然景観を取り込んだ古代都市：トラランカレカ」『古代文化』68(4):75-83。
- Kabata, Shigeru and Tatsuya Murakami (ed.)  
 2017 Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla: Informe Técnico de la Quinta Temporada 2016-2017. Consejo de Arqueología, México, D.F.
- Kabata, Shigeru, Tatsuya Murakami, Julieta M. López J., and José Juan Chávez V.  
 2014 Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico: Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla 2012-2014. *Boletín del Instituto de Estudios Latinoamericanos de Kyoto* 14:73-105.
- Langley, James C.  
 1992 Teotihuacan Sign Clusters: Emblem or Articulation? In *Art, Ideology, and the City of Teotihuacan: A Symposium at Dumbarton Oaks 8<sup>th</sup> and 9<sup>th</sup> October 1988*, edited by Janet Catherine Berlo, pp. 247-280, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- López, Alfredo, Austin and Leonardo López Luján  
 2001 *El pasado indígena*. Fondo de Cultura Económica, México, D.F.
- Lucero, Lisa  
 2003 The Politics of Ritual: The Emergence of Classic Maya Rulers. *Current Anthropology* 44:523-558.
- Martin, Simon and Nikolai Grube  
 2008 *Chronicle of the Maya Kings and Queens: Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*. Second edition. Thames & Hudson, London.
- Mathews, Peter and Gordon R. Willey  
 1991 Prehistoric Polities of the Pasión Region: Hieroglyphic Texts and Their Archaeological Setting. In *Classic Maya Political History: Hieroglyphic and Archaeological Evidence*, edited by T. Patrick Culbert, pp. 30-71. Cambridge University Press, Cambridge.
- McAnany, Patricia A.  
 1995 *Living with the Ancestors: Kinship and Kingship in Ancient Maya Society*. University of Texas Press, Austin.
- McCafferty, Geoffrey  
 2010 Ten Years of Nicaraguan Archaeology. Paper prepared for the 2010 Meeting of the Society for American Archaeology, Sacramento, CA.

- McCafferty, Geoffery and Larry Steinbrenner
- 2005 Chronological Implications for Greater Nicoya from the Santa Isabel Project, Nicaragua. *Ancient Mesoamerica* 16(1):131-146.
- Murakami, Tatsuya
- 2014 Social Identities, Power Relations, and Urban Transformations: Politics of Plaza Construction at Teotihuacan. In *Mesoamerican Plazas: Arenas of Community and Power*, edited by Kenichiro Tsukamoto and Takeshi Inomata, pp. 34-49. University of Arizona Press, Tucson.
- Murakami, Tatsuya, Shigeru Kabata, Julieta M. López J., and José Juan Chávez V.
- 2017 Development of an Early City in Central Mexico: Preliminary Results of the Tlalancaleca Archaeological Project. *Antiquity* 91(356):455-473.
- Newson, Linda
- 1987 *Indian Survival in Colonial Nicaragua*. University of Oklahoma Press, Norman.
- Nichols, Deborah L. and Christopher A. Pool (eds.)
- 2012 *The Oxford Handbook of Mesoamerican Archaeology*. Oxford University Press, Oxford.
- Salgado, Silvia
- 1996 The Ayala Site: A Bagaces Period Site near Granada, Nicaragua. In *Paths to Central American Prehistory*, edited by Frederick Lange, pp. 191-219. University Press of Colorado, Boulder.
- Sharer, Robert J. (ed.)
- 1978 *The Prehistory of Chalchuapa, El Salvador*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Stauber, Daniel
- 1996 Excavaciones arqueológicas e investigaciones preliminares en el sitio Los Placeres. In *Abundante Cooperación Vecinal: La segunda temporada del Proyecto Arqueológico de la Zona Metropolitana de Managua*, edited by Frederick Lange, pp. 37-48. Alcaldía de Managua, Instituto Nicaragüense de Cultura, University of Colorado in Boulder, Iowa State University, Colorado School of Mine, Managua.
- Sugiura, Yoko
- 1998 Desarrollo histórico en el Valle de Toluca antes de la conquista española: proceso de conformación pluriétnica. *Estudios de Cultura Otopame* 1:99-122.
- Sugiyama, Saburo and Leonardo López Luján
- 2007 Dedicatory Burial/Offering Complexes at the Moon Pyramid, Teotihuacan: A Preliminary Report of 1998-2004 Explorations. *Ancient Mesoamerica* 18:127-146.
- Sugiyama, Saburo and Rubén Cabrera Castro
- 2007 The Moon Pyramid Project and the Teotihuacan State Polity: A Brief Summary of the 1998-2004 Excavations. *Ancient Mesoamerica* 18:109-125.
- Tsukamoto, Kenichiro and Takeshi Inomata (eds.)
- 2014 *Mesoamerican Plazas: Arenas of Community and Power*. University of Arizona Press, Tucson.

原稿受領日 2017年5月20日

原稿採択決定日 2017年7月15日